障害のある人たちと自然災害
～能登半島地震から考える～

2024 年1月1日。津波警報を知らせるアナウンサーの声に息子が「逃げなくていいの」と何度も尋ね、怖がった。8歳の息子が熊本地震を経験したのは0歳の頃であり、地震の怖さを覚えているはずもない。しかし、アナウンサーの必死の呼びかけに緊迫した状況であることが伝わったのだろう。毎日、ニュースでは被災状況が伝えられる。被災状況が明らかになるたびに、被災した人たちのことを思うと胸が締め付けられる。

日が経つにつれ、障害のある人たちがどのような生活を送っているのだろうとふと思った。他の被災された人たちに比べると障害のある人たちの情報が明らかに少ない。障害のある人たちはどう過ごしているのだろう。どうやって情報を得ているのだろう。そう思い、インターネットで検索してみた。すると、『被災地から「#障害者を消さない」 能登半島地震を受け、ヘラルボニーが発信』という記事を見つけた。ヘラルボニーは、主に知的障害のある作家のアートと共に、福祉を起点に新しい文化創造を目指している会社だ。東日本大震災の際、重度の知的障害のある娘と一緒に避難所に身を寄せていた家族が、毎晩の大声に身も心も疲れ果て、「大声を出す娘の口をガムテープでふさごうと思った」と避難所を離れたとあった。また、何人もの障害のある人が、避難所から追放され、半壊した自宅への帰還、親戚の家に身を寄せる状況に陥ったとも述べられていた。そして、今回の能登半島地震にも障害のある人は必ずいると呼びかけられていた。こういった現状をどのくらいの人が知っているのだろうか。特別支援教育に携わっている私も知らない現状が書かれており、自分の無知な状況を恥ずかしく思った。

NHK 福祉情報サイトハートネットのサイトでは、障害種別に情報を得ることもできた。その中には、盲ろうの方を支援する人に対しての情報もあった。それを読みながら、息子が怖がった津波警報を知らせるアナウンサーの声を思い出した。息子はあんなに怖がったが、盲ろうの人たちにはあの緊迫感がどれだけ伝わったのだろう。非常時に私たち以上に情報不足になる盲ろうの人たちを支えるのは、周りにいる私たちしかいない。命を救うためには、普段の地域のネットワークを大切にしておかなければいけないと改めて感じた。

インターネットを検索すると、障害のある人のための情報もあれば、支援を行う人たちに向けた情報もある。しかし、この情報に気づき、活用する人がどれだけいるのだろう。調べれば調べるほど、厳しい現状が分かる。福祉避難所も被災し、障害のある人たちの行き場がなくなっていることも分かった。医療現場では、人工透析を受ける人たちのための水が足りないというニュースがあっていた。断水や停電が続いている中、医療的ケアが必要な人たちも同じような状況ではないだろうか。情報が

あっても現状として動けない。動いても迷惑がかかるのならここにいた方がいいのではないか。そういった思いが交錯し、障害のある人たちの避難生活はますます厳しいものになっていると感じた。

私たちは、これまで大きな地震を経験してきているのに、避難が困難な高齢者や障害のある人たちへの対策が十分ではないことが、今回の地震でもよく分かる。自然災害に遭遇した時に、障害のある人も私たちと同じように避難することができる社会を早急に整備していかなければならない。今回の地震で福祉避難所のことを知ったが、数が圧倒的に少ないことが分かった。それならば、障害のある子どもたちが通っている特別支援学校や支援学級の教室を開放できないのだろうか。少しでも慣れた環境で、避難生活が送れる方法はないか、みんなで知恵を出し合ってこの状況を打破していきたい。障害者差別解消法が制定されて約30年。本当にインクルーシブな社会ができているのか、この能登半島地震を機にもう一度問い直さなければならないと思う。

【引用文献・参考資料】

#障害者を消さない：ヘラルボニーHP, https://emergency.heralbony.jp/
能登半島地震　障害のある人たちの状況は：NHK 福祉情報サイトハートネット, https://www.nhk.or.jp/heart-net/article/888/
災害時障害者のためのサイト：NHK 福祉情報サイトハートネット, https://www.nhk.or.jp/heart-net/saigai/disabled/case01/index.html#Main
いらすとや：かわいいフリー素材集 いらすとや (irasutoya.com)